時評

環境問題解決には大局見よ

密接につながる森と川と海

佐藤　洋一郎
（総合地球環境学研究所教授）

京都に引っ越して「水がまずい」と感じた。ペットボトルの水を買ってお茶を淹れるありさまだ。住んでいたときには気がつかなかったが、静岡の水は水道水でさえおいしかった。もっと飲んでおけばよかったと後悔した。京都はじめ西日本では、夏に水不足に見舞われる地域が多い。私が静岡県にいた二十年間、断水など水のトラブルに巻き込まれたことはついぞなかった。

量・質ともによい水を確保する方法は、豊かな森を確保することだという。最近、伊勢神宮の森を訪ねる機会があった。神宮は二十五年に一度の遷宮に必要なヒノキ材を、自前の森で生産する方針という。普通に考えればヒノキばかりを植えて効率よく材を生産すればよさそうなものだが、神宮ではそうはしていない。ヒノキは、広葉樹が混ざった混交林で育てられる。そのほうが効率は明らかに低いのに、である。森を管理している倉田さんに聞いてみた。「ヒノキだけの森より、混交林のほうが健全な森になります。保水力も高い。さらに健康な森が下流に流す水は海に流れ、沿岸の貝や魚を育て、よい塩を作るのです」。いろいろな種類の木が生え、多様な生物がすむ森は、豊かな水を間断なく作る。神さまは生態系というものをよくご存知である。

森が荒れると保水力がなくなる。そんな森から流れ出る川は、ちょっと雨が降ると赤茶けた水が濁流逆巻くし、反対に少しの間雨が降らないだけで枯れあがる。増水した分はあっというまに海に流れ込んでしまうから、結局使える水は少なくなる。森が荒れると川には土が流れ込み、水質は当然に悪くなりミネラル分も不足する。沿岸の海が豊かなのはミネラル豊かな澄んだ水がちゃんと流れ込むからだが、よい水が断たれると海は貧しくなり、漁獲も減少する。森が荒れたことで近くの海が荒れた例はいくつも知られる。鮭が母川に帰ることができる理由のひとつが、それぞれの川に固有の水成分であるという人もいる。海と森とは、川を介して、さまざまにつながっている。

水問題はじめ環境をめぐる問題は、このように、いろいろなことが芋づる式に関係していることが多く、対症的な療法ではなかなか解決しない。最近静岡県でも、名物の生しらすなど魚介の生産が落ちているようだが、いっぺん森や川との関係を調べなおしてみる必要もあるだろう。ともかく、芋づる式の現象に答えを与えるには、当面の問題ばかりに目を奪われていてはいけないのである。

執筆者略歴

さとう・よういちろう氏
京都大学大学院研究科修士課程修了、静岡大助教授を経て2004年4月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲と日本史」（角川書店）「DNA考古学のすすめ」（丸善ライブラリー）など。